

匈奴の若干の地名について

佐藤 長

先に私は、單于・闕氏・匈奴等、基本的な匈奴語にモンゴル語を對比し、匈奴をモンゴル語族と規定し、白鳥氏の匈奴
||モンゴル語族説を確認した。⁽¹⁾もしこの説が信用できるものとする、匈奴の地名等もモンゴル語の知識によって解け、
その位置を比定できるのではないかと思うので、左に若干の地名について私見を述べたい。

尤も匈奴が古いモンゴル語を話したとしても、匈奴の崩壊後には高車・突厥・ウイグル等のトルコ系の諸族が次々と起
り、モンゴリアの高原を支配していたので、地名にはトルコ語が多く残っているように思われるが、モンゴル帝國以後は
勿論この地は再びモンゴル語地域となったので、反って古いモンゴル語の地名は残存・復活したらしい。本稿で用いる地
圖類は清代・現代のものであるが、それに現れる地名は殆どモンゴル語で解けるものである。尤も匈奴時代から清代に至
るまでは、匈奴王國の終末を後漢末期ととつても、時間は千數百年を越しており、その間の地名を變化なしとして一言語
でつなぐのは大膽に過ぎるかもしれない。しかし案外この地の文化的停滯の故か、地名は變っていないようである。今は
地名が殆ど變っていないという前提の下に比定の作業を行つてみたい。

(一) 賓顏山・趙信城

741 元狩四年(前一二九)大將軍衛青・票騎將軍霍去病は、十萬騎を率い分軍して匈奴を討つた(漢書匈奴傳上)。

(a) 「兩將軍」みな約して幕を絶り匈奴を撃つ。單于これを聞き、その輜重を遠ざけ、精兵を以て幕北に待つ。漢の大將軍と接戦すること一日、會暮れ、大風起る。漢兵左右翼を縱ち單于を圍む。單于自ら戦い漢兵に與く能わざるを度り、遂に獨り壯騎數百と漢の圍みを潰し、西北に遁走す。漢兵、夜これを追うも得ず。行きて首虜を捕斬すること凡そ萬九千級。北して賓顔山・趙信城に至りて還る。

右の文のうちの趙信城は、孟康の注に、「趙信の作るところ、因て以て城に名づく」とあり、漢書卷五五、霍去病傳の如淳の注にも、「趙信、前に匈奴に降る。匈奴城を築いて之に居る」とある。即ち一旦漢に降服した匈奴人趙信が匈奴に戻り、單于に信任せられて作った城である。又、征和三年(前九〇)の貳師將軍李廣利の作戰にもこの城の名が出てくる(前掲書)。

(b) その年、匈奴また五原・酒泉に入り、兩部の都尉を殺す。是に於て漢は貳師將軍七萬人を遣して五原に出でしめ、御史大夫商丘成に三萬餘人を將いて西河に出でしめ、重合侯莽通に四萬騎を將いて酒泉を出でしむること千餘里。單于、漢兵の大出を聞き、悉くその輜重をして趙信城に徙らしめ、北して郅居水に邸いる。

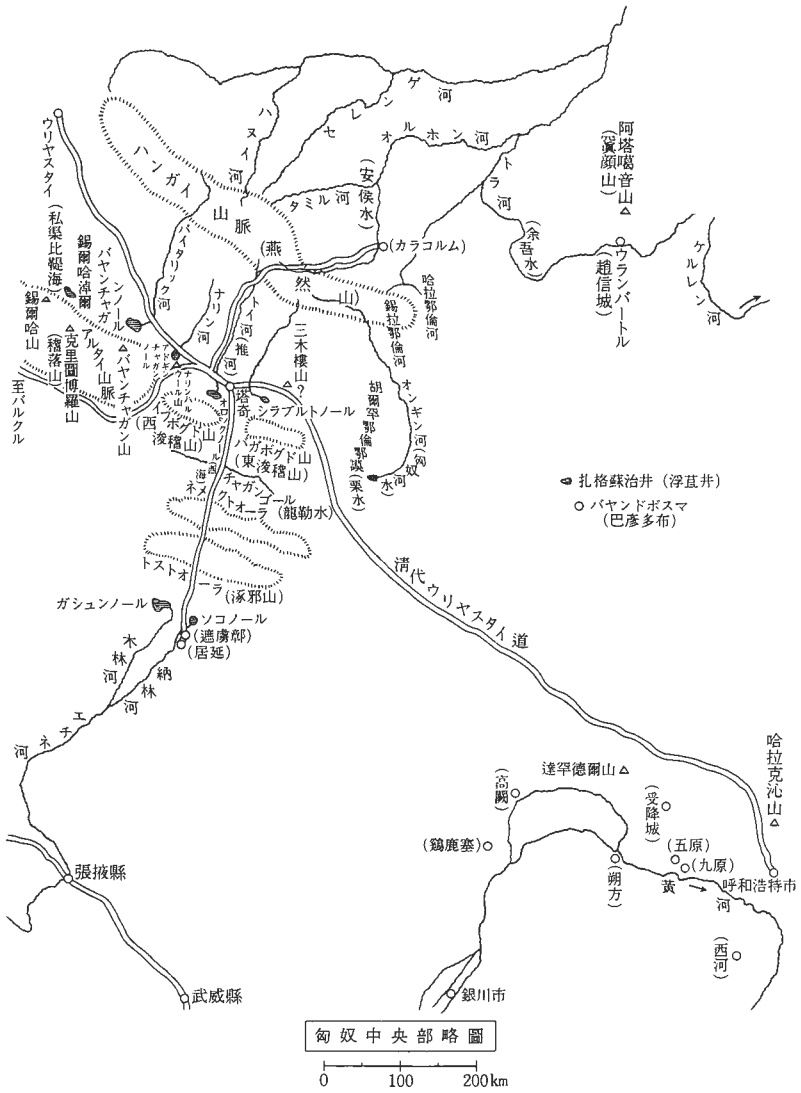
この文の最後のところは、單于が輜重を趙信城に移し、北して郅居水即ちセレンゲ河に至ったというのである。a文によれば、「衛・霍の兩將軍が沙漠を渡って匈奴を討ち、單于は漠北において之を俟つ」とあるからには、趙信城は漠北にあった筈であるし、セレンゲ河の南の要地に存在したことになるであろう。そこでその存在した賓顔山は何處かであるが、ウランバートルの北の阿塔噶音達巴漢(内府輿圖七排西一)・阿達海嶺(Fuchs, Nr. 6)ではなからうか。賓顔山はこの阿塔噶音の語頭の阿が略された形と思われるのである。賓顔山の位置に誤りがないとすると、趙信城は山の西側の阿塔塚必拉(前掲内府輿圖)、或は南のウランバートルの附近にあったとすることができる。ただ阿塔噶音のモンゴル語の意味は定めがたい。

(二) 姑 且 水

征和三年に貳師將軍・商丘成・莽通等が大軍を率いて匈奴を討つたことは右に述べたが、そのb文に續いては次のごとくある(漢書匈奴傳上)。

(c) 左賢王、その人民を驅りて余吾水を度ること六、七百里にして、兜銜山に居る。單于自ら精兵を將いて安侯を左にし、姑且水を度る。

この史料における左賢王の行動のうち、余吾水はトラ河 Torula youl、兜銜山は突厥等の據つたウトゥケン山 Utkän 山と從來考えられており、それに従⁽³⁾いたい。これは次に述べる單于のセレンゲ河から南下して姑且水に出る行動を側面³⁾で防備するための作戦的移動であろう。問題の單于の行動のうち、安侯はオルホン河 Orqon youl で、これも古くから定説となっている。そこで單于は、「オルホン河を左にして姑且水を渡つた」というのは、テキストによれば、セレンゲ河を出發してオルホン河の西岸を南進したことになるであろう。この道はオルホンの水源地でハンガイ山脈を越え、トイ河(推必拉、Tui yin bira)の水源、推必拉色欽 Tui yin bira sekien に出、それより西隣の支流伊羅河に沿って南へ下り、トイ河の注ぐオロックノール(鄂羅克淖爾、Orog narun)の北でウリヤスタイルートに合する(内府輿圖七排西二、八排西二)。これは唐代・清代でもオルホン方面より南に通ずる大道であり、匈奴の時代も同様の幹線道路であつたのであろう。而して内府輿圖では伊羅必拉の中流あたりに推和碩なる地名があり、これは Tui yin qoso と考えられる。姑且水の姑且 kuo tsiuo はこの qoso (山嘴)に當るもので、これによってトイ河を姑且水と呼んだに相違ない。即ち單于はトイ河に沿う道を辿り、推和碩よりハンガイ山の南麓を西へ逃れようとしたのである。



(三) 浚 稽 山

内田氏は浚稽山を、「推河の上源地である杭愛山」と見ているが（匈奴篇一一頁）、少しく位置が違うと思う。漢書匈奴傳上は、文に續いて次のごとくいう。

(d) 御史大夫「商丘成」の軍至りて邪徑（側道）を追うも、見るところなし。還る。匈奴、大將と李陵とをして三萬餘騎を將いて漢軍を追わしむ。浚稽山に至りて合し、轉戦すること九日。漢兵陣を陥し敵を卻け、虜を殺傷すること甚だ衆し。

このときの漢側の作戦については、漢書卷六武帝本紀、征和三年三月の條にも、商丘成が浚稽山で戦い勝利を収めたことが出てゐる。ただ浚稽山はこれのみを以てしては不明であるので、それより前天漢三年（前九八）貳師將軍が三萬騎を率いて右賢王を天山に伐ち、李陵が自ら武帝に願つて別働隊を率いてこれを援けたことについて考えてみたい（漢書卷五四、李陵傳）。

(e) 上、壯としてこれを許す。因て彊弩都尉路博德に詔し、兵を將いて半道に陵の軍を迎えしむ。博德はもと伏波將軍、亦陵の後距となるを羞ず。奏言すらく、「秋に方り匈奴の馬肥ゆ。未だともに戦うべからず。臣願わくば、陵を留めて春に至り、俱に酒泉・張掖の騎各五千人を將い、並に東西浚稽を撃たば、必ず禽うべきなり。書奏せらるる……陵に詔すらく、「九月を以て發し、遮虜鄣を出で、東浚稽山の南、龍勒水上に至り、徘徊して虜を觀よ。即ち見るところなければ、促野侯趙破奴の故道より受降城に抵り、士を休めよ。」……陵是に於てその歩卒五千人を將いて居延を出で、北行すること三十日、浚稽山に至りて止り營す……陵浚稽山に至り、單于と相直る。騎およそ三萬、陵の軍を圍む。軍は兩山の間に居り、大車を以て營となす。

(f) 漢軍南行し、未だ鞬汗山に至らざるに、一日に五十萬の矢みな盡く。即ち車を棄てて去く……軍士をして人ご

とに二升の糶・一半の氷を持たしめ、遮虜部に至らばたがい待たんことを期す……〔陵〕遂に降り、軍人分散す。脱れて塞に至る者四百餘人、陵の敗るる處は塞を去ること百餘里なり。邊塞以て聞す。

この文では「東西浚稽」又は「東浚稽山」という地名が出てくるので、浚稽山は東西に並んだ山であることが先ず知られる。李陵の出發は、武帝の詔のごとく行われたであろうから、その出發地點は遮虜部即ち居延城内である。⁽⁴⁾ 李陵はここを出て「北行三十日」にして浚稽山に至って屯營したのである。而してそこで彼は單于の軍と「相直った」のであるから、これは先に述べたオルホンよりトイ河に沿って南下する大道を北へと向い、そこで單于と相對抗する形をとったことになる。前述のごとくトイ河は下流でオロックノールに注いでいるが、この湖の南に、あたかも門を構えるがごとく、西に *Ih bogd nul* \wedge *Yeke boyda ayula*、東に *Baga bogd nul \wedge *Baya boyda ayula の小山脈が存在する (ONG, F. 8)。フックスの地圖では、也克傲拉・巴噶傲拉がこれに當るが (Fuchs, Nr. 19) 兩山が連続した形になっている。恐らくこれが東西浚稽山に相違ない。漢軍が、「兩山の間に大車を並べて陣營を構えた」というのも、兩山がここで並列して關門的構成をなしているためであろう。龍勒水は、「東浚稽山の南」とあるから、その南の草原を西北より東南に流れている尻無川 *Tsagan gol* \wedge *Caran youl* を指していることはまちがいない (ONG, F. 8)。**

f 文は李陵の敗退の記事であり、漢書卷五四李陵傳にも同様の記事がある。彼が未だ至らなかつた鞬汗山は、東西浚稽山から歸還の地と定めた遮虜部までの間にあったことになる。地圖上では東西浚稽山のほぼ正南に *Nanegat nul*、その正南に *Tost nul* が共に東西に跨がる小山脈として存在している (ONG, *ibid.*)。「陵の敗るる處は遮虜塞を去ること百餘里」とあるから、鞬汗山はネメグト山又はそのうちの一峰に違いなく、その山の附近で陵は敗戦し、匈奴に投降したのである。鞬汗山の原名も亦不明である。

ただ浚稽山はハンガイ山ではなく、その前面即ち南方の東西に並立する小山脈、大小ボグド山脈であることはこれで明らかになったと思う。その名の浚稽 *siwen kiei* は多分モンゴル語 *Siqui* (pron. *soxi*) 「石灰」に對應する匈奴語で、石灰

又は石灰岩質の山なのであろう。

(四) 涿 邪 山

後漢の竇憲の北匈奴討伐の翌年、永元二年(九〇)には行度遼將軍皇甫棱が左谷蠡王師子等とともに鷄鹿塞より出動し、涿邪山に全軍集結し、ここから二軍に分れて精騎萬餘を以て北單于を襲い、稽落山に戦つて大にこれを破つた。この涿邪山の位置については、白鳥氏は、「ハンガイ山脈の南支沙漠中に斗出せる山なるべし」とし、最近では内田氏がバルクル湖の東方尼赤金山に比定している(匈奴篇一三頁)。しかしこれらの比定には疑問があり、反つて別の地に考えることができるのではないかと思われるので、それを次に述べよう。

後漢書南匈奴傳によると、永平十六年(七三)、後漢軍は南匈奴と共同で涿邪山に溫馬犢王を攻撃するため、朔方から出撃した。溫馬犢王はこれを避けて沙漠を渡つて去つたが、建初元年(七六)には王は又民衆を率いて涿邪山に還去してしたので、南單于は輕騎を以てこれを伐ち、斬首數百、降者三、四千人を得た。更に同傳には、

(g) 伊屠於閭鞬單于宣、元和二年(八五)立つ。その歳、單于兵千餘人を遣し、獵して涿邪山に至る。卒に北虜の溫馬犢王と遇い、因て戦い、その首級を得て還る。

とある。右によれば涿邪山は、内田氏のいうごとく、溫馬犢王の根據地であつた(匈奴篇、一一一、一一二頁)。では涿邪山は何處にあつたか。それについてこの地の特徴を伝えるのは、成帝綏和二年(前七)の漢と匈奴の烏珠留若鞬單于との交渉である。この年、漢は張掖郡に近い匈奴の地を割讓することを匈奴に要求した。當時の領尙書事で帝舅でもあつた大司馬票騎將軍王根に或る人が説いた(漢書匈奴傳下)。

(h) 匈奴に、漢に斗入するの地あり。張掖郡に直る。奇材木・箭竿・就羽(鷲の羽)を生ず。もしこれを得れば邊甚だ饒ならん。

「漢に斗入するの地」とは、かけ離れて漢の領域に食い込んだ土地であり、それは「張掖郡に最も近い所」であった。この後、漢の使者夏侯藩が單于に説いた言葉に（前掲書）、

(i) 竊に見るに、匈奴の漢に斗入するの地は張掖郡に直る。漢の三都尉は塞上に居り、士卒數百人は寒苦すとあり、續いて再度使した藩に單于が拒絶した言葉として（前掲書）、

(j) 已に溫偶駱王に問うに、匈奴の西邊の諸侯、穹廬及び車を作るに、皆この山に材木を仰ぐ。

とある。これは涿邪山が匈奴西邊に對して木材その他を供給する地であり、溫偶駱王はこれらの地を支配する王であったことを示している。とにかく右の h・i・j の三史料により、涿邪山は張掖郡に最も近い匈奴の地であったことが判明するが、先に李陵に關して觸れたごとく張掖居延の正北にはトスト山 *Tost sun* なる小山脈が東西に横わっている（一〇六頁）。この *Tost* はモンゴル語の *Tosutu*（豊かな、肥えた）の意とすれば、g・j の史料にあるごとく「獵獸が多い」、「木材が多い」の説明によく一致するものである。涿邪山は明らかにこのトスト山を指すものとしなければならない。

では涿邪山という名の由來は何なのであろうか。モンゴル語には「關門」を意味するものとしてジャジャ *Jaja* なる語があり、これが匈奴語涿邪 *Takia* に對應するのではあるまいか。恐らく h・i の史料の示すがごとく、居延より匈奴に聯絡する大道上の匈奴側の「關門」、或は「國境上の寨」の意味でこの名が附されていたのであろう。

(五) 稽落山・金微山と私渠比鞮海

章和二年（八八）に南匈奴では屯屠何が即位し、休蘭戸逐侯鞮單于となったが、この年北匈奴には大亂が起った。後漢書南匈奴傳には、

北虜大に亂る。加うるに飢蝗を以てす。降る者前後して至る。

とあり、分裂状態に陥ったことをいう。屯屠何は、これを北匈奴を撃滅する絶好の機會と見、上言して、「今年往かざれ

ば、恐らくは復并さりて壹たらん」、又、「臣が國の成敗、要は今年にあり」といって出兵を促した。そこで翌永元元年（八九）には寶憲が大軍を率いて朔方鷄鹿塞より出陣し、北單于は忽ち逃亡し、首虜二十萬餘人という戦果を擧げた。このとき寶憲等の軍は、「皆涿邪山に會し」⁶「稽落山に戦つた」というから（後漢書卷三三寶憲傳）、居延の西北トスト山より北してオロクノールの東邊即ち塔奇附近に出たことが明らかである。

永元三年（九二）に、北單于は更に右校尉耿夔の軍に破られ、逃亡して行方知れずになり、その弟右谷蠡王於除鞬が自立して單于となった。彼は當時バルクルに居たが、そこから遣使して和平を求めてきたので大將軍寶憲は上書し、これを認めんことを願ひ、翌四年（九三）には使中郎將任尙が伊吾（ハミ）に屯してそれを護衛し、北庭に歸すようにした。しかしこの政策の推進者寶憲は同年に誅せられ、翌五年（九四）には於除鞬は漢に叛して北へ歸つた。長史王輔が和帝の命を受け、任尙とともにこれを追ひ、於除鞬を斬つてその衆を破つた。

永元元年の戦については寶憲の傳に次のごとくある（後漢書卷三三寶憲傳）。

精騎萬餘、北單于と稽落山に戦う。大にこれを破る。虜衆崩壊し、單于遁走す。諸部を追撃し、遂に私渠比鞬海に臨む。名王已下萬三千級を斬り、生口馬牛羊橐駝百餘萬頭を獲たり……〔寶〕憲・〔耿〕秉、遂に燕然山に登る。塞を去ること三千餘里、石に刻し功を勒し、漢の威徳を紀す。

ここで問題となるのは、稽落山と私渠比鞬海の位置である。寶憲の進路は、右に述べたごとく、オロクノールの東邊に出るものであったが、この湖の東邊で西進ルートは、西北方ウリヤスタイに向う道、西方ハミに向う道の二つに分れる。このときの北單于の所在がウリヤスタイルートの上にあるとすれば、その位置は西避とともに益々弟於除鞬の根據地、バルクル方面とは離れてゆく。故に北單于はオロクノールから程遠くない兩ルートの間をいたものとせざるを得ない。そこでオロクノールの東、塔奇より西へ進むと、克里圖博羅阿林（内府輿圖八排西二）・克里圖博羅山（Fuchs, Nr. 19）なる山を發見する。これが稽落山であろう。克里圖博羅阿林のモンゴル名は難解であるが、Gkirtu boro alin（汚れた灰色の

山)であるとすれば、稽落はこの語のはじめ *Gkir* (= *Kir*) (汚れた) を寫したものであろう。内府祕圖二排四號には同山を *Kelitu boro alin* とするが、漢字音をそのまま滿洲文字で寫しただけで、もとのモンゴル語の轉寫とは思われない。内府輿圖と *ONC* を併せ見ると、拜塔里克必拉の流れ入る湖が察罕淖爾であり (内府輿圖八排西二)、それは *Bön tsagan nuur* (*ONC*, F. 8) に當り、この湖名は、その南に *Bayan tsagan uul* があるから、綴字は *Bayan cayan nayur* である。その察罕淖爾の西に克里圖博羅阿林があり、それが *ONC* では九、〇二〇フィートの高山に當るであろう。

この稽落山と同一と思われるのが耿秉の弟夔の戦った金微山である (後漢書卷一九耿夔傳)。

〔永元〕三年、〔夔〕憲また河西を出ず。夔を以て大將軍左校尉となし、精騎八百を將いて居延塞を出で、直に北單于の廷に奔る。金微山に於て闕氏・名王已下五千餘級を斬る。單于、數騎と脱れ亡ぐ。盡くその匈奴の珍寶財畜を獲り、塞を去ること五千餘里にして還る。漢よりの出師の未だ嘗て至らざるところなり。

同様に (後漢書卷三三竇憲傳)、

明年 (永元三年) 〔竇憲〕また右校尉耿夔・司馬任尙・趙博等を遣し、兵を率いて北虜を金微山に撃たしむ。大にこれを破る。克獲甚だ衆し。北單于逃走し、在る所を知らず。

とある。耿夔が居延の塞を出で直に北單于廷に至るといふのは、前例のごとくオロックノールのあたりに直行したことである。北單于はトイ河の西方草原にいたのでここに至り、金微山で戦ったということであろう。この金微山は先の稽落山即ち克里圖博羅阿林に比定するより外はない。金微 *kiam niwazi* は *Gkirtei* (= *Gkirü*) を寫したものと考えられるからである。それにしても、「塞を去ること五千餘里」或は「漢よりの出師の未だ嘗て至らざる所なり」といふのは誇張であらう。ただ殆ど同時期の戦でありながら、一方では稽落山といい、他方では金微山というのは報告者が前者では竇憲であり、後者では耿夔であったからであらう。

尙白鳥氏は金微山をアルタイ山脈中の一峰とするが、アルタイ山の南支と見れば當たっていると思われる。(7)

續いては私渠比靉海の位置であるが、これは永元二年に、憲の遣した大將軍中護軍班固が大使となって北單于のもとに行き、「私渠海に至って還った」(後漢書竇憲傳、同書卷四〇下、班固傳)とある私渠海と同一のものであろう。清代の地圖等を見ると、克里圖博羅阿林より西北に上った所に錫爾哈淖爾がある(内府輿圖七排西二)。これが私渠比靉海の位置であろう。私渠比靉 **sier gio pier tieg* は *Siryul beliger* (茶色の草地)と思われ、海はこの草地そのものであるからである。*Siryul* は本来馬の栗毛色を意味し、栗毛色の馬が *Sirya* である。先ず湖名の *Sirya nayur* があり、それに關聯して草地名が生じたのであろう。内府輿圖と *ONG* とを併せ讀むと、克里圖博羅阿林の西北に錫爾哈阿林—*Serh uul* があり、その東に乾湖がある。*ONG* では名は附せられていないが、これが錫爾哈淖爾に違いない(内府輿圖七排西二、*ONG, F-7*)。ここで北單于の本隊は徹底的打撃を受けたのである。

竇憲の軍がオロックノールの東を通る道を通ったことは、北魏の世祖太武帝が神麿二年(四二九)に蠕蠕の大檀を伐ったときの記録によっても明らかである(魏書卷一〇三、蠕蠕傳)。

〔二年四月〕車駕は東道に出で黑山に向い、平陽王長孫翰は西道より大娥山に向い、ともに賊庭に會せんとす。五月、沙漠南に次り、輜重を舍いて輕かにこれを襲う。栗水に至り、大檀の衆西奔す。弟匹黎先に東落を興る。まさに大檀に赴かんとし翰の軍に遇う。翰騎を縱ってこれを撃ち、その大人數百を殺す。大檀これを聞いて震怖し、その族黨を將い、廬舍を焚燒し、跡を絶ちて西走し、至る所を知るなし。是に於て國落四散し、山谷に竄伏し、畜産野に布くも人の收視するなし。世祖栗水に緣って西行し、漢將竇憲の故壘を過ぐ。六月、車駕兔園水に次る。平城を去ること三千七百里。軍を分つて搜討し、東は翰海に至り、西は張掖水に接し、北は燕然山を渡る。

先ず東道に出で世祖の向った黑山である。これはフフホトの北にある哈拉克沁阿林(内府輿圖八排西一)・喀喇克親山(*Fuchs, Nr. 8*)・*Karagcin alin* < *Qaraycin alin* (内府祕圖三排二號)であらう。意味はまさに「黑山」そのものである。西道に出で長孫翰の向った大娥山 *d'ai nga* は、烏拉特前旗(當時の沃野鎮の正北)の北にある達罕德爾阿林(内府輿圖八排西

一)・大漢得兒山 (Fuchs, Nr. 8)・Dahan del alin < Darayan del alim (仔馬の鬣のような山) (内府秘圖三排三號) であろう。では共に會することを期した賊庭は何處か。これについては同じ蠕蠕傳の中に、大檀に先行する社論について、社論遠く漠北に通れ、高車を侵し、深くその地に入る。遂に諸部を并せ、凶勢益々振う。北して弱洛水に徙り、始めて軍法を立つ。千人を軍となし、軍ごとに將一人を置く。百人を幢となし、幢ごとに師一人を置く。

と述べ、弱洛水が彼等の根據地であったことをいっている。弱洛水はオンギン河に當てられることが多いが、その理由は必ずしも充分に説明されたことはない。これはそれより更に北のハンガイ山脈東部を越えた所にあるトラ河の一水源地、錫拉鄂倫必拉 (内府輿圖七排西一)・Sira ulan bira < Sira ulayan bira (内府秘圖二排四號) に相違ない。弱洛 *ni'ak la* は *sira* (= *sara*) を寫しており、錫拉鄂倫必拉は哈拉鄂倫必拉 *Qara ulayan bira* (内府秘圖二排三號) と並んでトラ河の水源地帯を形成している (ONG, F-8)。ここはハンガイ山脈の北に當り、唐代のカラバルガスン、清代のエルデニジョーの東南に位置し、正に北方民歴代の王庭の地そのものである。世祖・長孫翰の目差した蠕蠕の王庭はこの地と見て誤りない。世祖等は黒山・大嶽山より正北に作戦軍を進め、根據地弱洛水に至らず、途中で匹黎の軍を伐ち、栗水から西へ軍を轉じたのである。

五月になって至った栗水は、オンギン河又はその注ぐ湖、胡爾罕鄂倫鄂謨 (内府輿圖八排西一)・呼拉喀五郎鄂模 (Fuchs, Nr. 8) であろう。多分その色が濃い茶色であったために、栗水の名で呼ばれたのであろう。世祖はこの河又は湖の邊によって西行し、「後漢の寶憲の故壘を過ぎた」という。この文章は重要である。憲は前述のごとくトスト山から正北行してオロックノールの東に出た。世祖も大凡においてオンギン河口から西行してこの地に出たのである。ここは前にも觸れたごとくオルホンの王庭から南に下る幹線道路がウリヤスタイルートと交る所である。

世祖が次に至った兔園水 *iuo i'uan* はまちがいに、北方から流れ來りオロックノールに注ぐトイ河 *Tui yin youl* (8) 即ち推河である。その後世祖が北に進んで至った燕然山がハンガイ山であることは、後に述べる。

尙魏書卷三五崔浩傳には、世祖の道程について、

世祖弱水に沿うて西行し、涿邪山に至る。

という。弱水は内田氏が釋することく、北魏代にはエチネ河を指すことはまちがいないが(匈奴篇一二三頁)、これは崔浩傳が蠕蠕傳の粟水を弱水と見なしたための誤った記述である。涿邪山も前述のごとくトスト山であれば、それはエチネ河の河口の正北にあり、エチネより西行して至る所ではない。而して粟水がエチネ河であれば、そこより西行して「寶憲の故壘」・「菟園水」には會わない筈である。何となれば、これらの地はエチネ河より見てもその正北の方向に當り、「西行」の方面には存在しないからである。やはり粟水はオンギン河又はその注ぐ湖と考えざるを得ない。とすると西行して行き當った「寶憲の故壘」はトスト山よりオロクノール東邊までの線の何れかの地であり、形勢から察すると前述のごとくオロクノールの東邊、塔奇あたりにあつたことになる。

(六) 燕 然 山

ところで寶憲・耿秉、或は魏の世祖の登つた燕然山とは何處の山であろうか。漢書匈奴傳上には「文の後に、貳師將軍が巫蠱の變で家族が擒われたのを救わんとして前線での功を急ぎ、反つて單于の作戰に罹り降服せざるを得なかつた狀況を次のごとくいう。

貳師深く入つて功を要めんと欲し、遂に北して郅居水上に至る。虜已に去る。貳師護軍を遣し二萬騎を將いて郅居の水を度らしむ……〔貳師〕兵を引いて還り、速邪烏燕然山に至る、〔單于〕夜、漢軍の前に壻す。深さ數尺、後より急にこれを撃つ。軍大に亂れ敗れ、貳師降る。

貳師の軍はセレンゲ河を渡り、引返して速邪烏燕然山に至っている。速邪烏 *sak *zia no* は *Sijigü* (尊敬すべき) と關聯ある語で、燕然山が神格化されている故の形容であろう。顔師古は、

速邪烏は地名なり。燕然山は其中にあり。

と注するが、従いがたい。しかしこれで燕然山は明らかにセレンゲ河の南にあることになる。この山は従来もハンガイ山に比定され、實はそれがそのまま承認できるのであるが、名稱の由來は明かでなかった。ハンガイ山東部がウトゥケン山を含み、突厥等の遊牧民にとつて神聖な山とされていたことは、既に山田氏が述べるところで、⁽⁹⁾ そうとすると前代の匈奴の時代にもやはりハンガイ山は彼等に神聖視されていたことは推測できるのである。従つてモンゴル語で神を意味する *Tengri* yin ejen (天の主) に對應する匈奴語で以てこの山が稱されていたことも推定できよう。よつて燕然 *ien wai-tian* は Ejen (神) の音譯に相違ない。ハンガイ山は又匈奴の時代に天山とも呼ばれたことは駒井氏が早くから指摘していたが、⁽¹⁰⁾ これも「神の山」の意の匈奴語で稱され、それが天山と譯されたのであろう。⁽¹¹⁾

これらによつて後漢の時代となつて竇憲・耿秉の軍が到達した燕然山は勿論このハンガイ山に相違ないことが分る。尤もハンガイ山は東西に長い山脈であり、兩將軍の登つた所がその何處に當るかは遽かには定めがたい。内府輿圖(七排西二)が抗靈阿林と標しているのは堆必拉・鄂爾渾必拉の水源地帯であり、ONC、P¹⁰⁸ではそこに一一、九八〇・一一、七〇〇フィートの高山が並んでいるので、この附近が彼等の目差した燕然山であろう。⁽¹²⁾ 或は突厥時代のウトゥケン山もこの所の山を指しているのかもしれない。

(七) 匈奴河水

竇憲の北匈奴討伐の翌年、永元二年(九〇)春に、南匈奴單于の請により、再び北匈奴の討伐が行われた(後漢書南匈奴傳)。

南單于また上りて北庭を滅さんことを求む、是に於て左谷蠡王師子等を遣し左右部八千騎を將いて鷄鹿塞を出でしめ、中郎將耿譚、從事を遣して以てこれを護らしむ。涿邪山に至り、乃ち輜重を留め、分ちて二部となし、各々輕兵

を引いて兩道よりこれを襲う。左部は北して西海を過ぎ、河雲の北に至る。右部は匈奴河水より西して天山を繞り、南して甘微水を渡り、二軍俱に會し、夜北單手を圍む。……單手劍を被り、馬より墮ちてまた上る。輕騎數十を將いて遁走し、僅にして免れ脱る。

この戦は北單手の慘憺たる敗北で終つたが、ここに出でくる匈奴河水が問題である。出發點の涿邪山は前述のごとく居延の正北のトスト山で、ここで軍は左右に分れた。

先ず左部であるが、「北して西海を過ぎ河雲の北に至つた」という。これも前に觸れたが、トスト山から北方への進撃は東西浚稽山の間を通つて行われるのが普通である。西海というのは漠然としているが、このルートによる限り、道はオロックノールの所に出る。そのオロックノールは、東にシラブルトノール(錫拉布里圖淖爾、*Sraditu naryr*)と並んで存在しているから(内府輿圖八排西二)、西海は正にオロックノールそのものであろう。人によっては更にその西のバイタリック河(拜達里克必拉、*Bayitaray bira*)の注ぐチャガンノール(察罕淖爾、*Caran naryr* = *Bayan caran naryr*)をいうものもあるが、これでは西海たる所以の説明はできない。この西海はシラブルトノールと並んで初めてオロックノールそのものを指すことになるであらう。ではその次に至つた河雲は何處か。これはその西北ナリン河 *Naryin youl* (内府輿圖八排西二、納壘必拉)の注ぐアドギンチャガンノール *Adgigin tsgan nuur* (内府輿圖八排西二)の南のナリンハルウール山 *Naryin har uul* (内府輿圖八排西二)の注ぐ *Qara ayula* (ONG, F-8) にあつた。河雲 *ga jian* がこのハルウール *Qara ayula* を寫したものに相違ない。

右部の作戰ルートは當然この中央道より東を迫る道である。これを逆に甘微河から下って行ってみよう。甘微河 *kam nywai* は多分タミル河の上流北側を東北へ流れ、セレンゲ河の上流を形成するハヌイ河 *Hanni gol* (内府輿圖八排西二) にあつた(ONG, F-8)。天山はハンガイ山で、「これを繞る」というのは北側を廻つたことである。とすると匈奴河水は如何にしてもオンギン河と考えるより外はない。即ち右部作戰の道程は、オンギン河西岸に沿つてハンガイ山の北側に出、

西行してハヌイ河上流を渡ったことになる。左右兩軍の俱に會した地點は明らかでないが、ハヌイ河とハルウル山の間とすればハンガイ山の南側の草原地帯であろうし、戰場もその附近ということになるであろう。左右の軍、特に右軍の北からの出現は、北單于の多分豫期しなかつたことと思われ、北單于が行方知れずになる程大敗したのも當然のことと考えられる。匈奴河水はオンギン河として確定したと思うが、尙關聯する二、三の史料をここに検討してみよう。

後漢の明帝永平十六年(七三)に寶固は北匈奴討伐に向つたが、そのときの各軍は次のようなものであつた(後漢書南匈奴傳、寶固傳)。

	出發點	目的地
第一 寶固・耿忠の軍(主力)	酒泉↓天	山↓蒲類海↓伊吾廬
第二 耿秉・秦彭の軍	居延	塞↓三木樓山
第三 祭彤・吳棠の軍	高闕	塞↓涿邪山
第四 來苗・文穆の軍	平城	塞↓匈奴河水

第一の寶固軍の作戦路は、酒泉からハミに至る西北ルートで、ここにいる天山は東トルキスタンの天山山脈である。軍は「この山で呼衍王を討ち、王の奔るのを追つて蒲類海に至つた」というからには、恐らくハミを通つて科奢圖達巴漢 Kōsijetü dabagan (内府輿圖八排西二)の附近で戦が行われ、この峠を越してバルクルへと追撃を敢行したのであろう。而してこのルートを戻つてハミ(伊吾廬)に軍の一部を駐屯させたのである。従つてこの天山は天山山脈の東端と見るより外はない。

第二の耿秉軍の目的地三木樓山は難解であるが、對匈奴の基本的大道が居延からオロックノールに向うものであつたことを考えると、恐らく耿秉軍はこの大道を直進したものとせざるを得ない。とすると彼等はオロックノールの邊りを目標として定めていたと思われるが、この湖の東には錫拉布里圖淖爾がある(内府輿圖八排西二)。音の類似からするとこの湖

の傍に三木樓山 *san muke lau* < Sarbir ul > Sirabir *ayula* があつたのではなからうか。⁽¹⁴⁾ 居延からの六百里という距離もほぼこれに該當するであらう。ONG, F-8 には錫拉布里圖淖爾を *Taatsin tsagaan nuur* とし、その東北に七、一二〇フィートの山を記している。蓋しこれが三木樓山であらう。但し三木樓の木字は不 *pieu* の誤りと見ての話である。

第三の祭彤軍が涿邪山を目標にしたのは、耿秉軍がここを通過して北進した後、その後方に備えるために移動の命を受けたものと見たい。

第四の來苗軍の出發點は平城（大同附近）であり、そこから北行して至る匈奴河水は、やはりオンギン河とするより外はない。最右翼の軍としてオンギン河方面に向うのは極めて自然な作戦のあり方と見られるからである。

いま一つの例は、前漢の元鼎六年（前一一一）に行われた作戦である（史記匈奴傳）。

烏維單于立ちて三年、漢は已に南越を滅す。故太僕〔公孫〕賀を遣し萬五千騎を將いて九原を出でしめること二千餘里、浮苴井に至りて還る。匈奴の一人も見ず。漢また故從驃侯趙破奴の萬餘騎を遣し、令居を出ずること數千里、匈奴水に至りて還る。亦匈奴の一人も見ざりき。⁽¹⁵⁾

この文中の浮苴井は九原から二千餘里とあるが、九原より正北に進むと巴彥多布の北に扎格蘇治井なる地名を發見する。これが浮苴井の所在地であらう。前述の推和碩との關係も考えられるが、この間の距離は二千餘里を遙かに越すので成立しなご。ONG, F-8 には *Bayan dobo suma* (巴彥多布) の北 *Buyantu ovoo* < *Buyantu obuya* の近邊がこれに當る。扎格蘇治は *Jirasuci* (漁夫) と思われるので井は泉というよりは小湖であらう。趙破奴の至った匈奴河水は、漢書匈奴傳上の同様の文では匈奴河水に作っているが、同一の河と見て差支えない。ただそうすると趙破奴は令居（蘭州北）を出てから正北に進みオンギン河に至ったものと考えられる。距離は九原・浮苴井間の二倍はあると思われるので、數千里というのもそれ程誇張された言辭ではないであらう。

以上主として清代・現代の地圖に現れたモンゴル名を手がかりに匈奴の地名をそれぞれ比定してきた。中には既に比定されている地名もあるが、本稿でより一層確實さを加えた地名もないではない。例えば「中國歴史地圖集」第二冊第三十圖、匈奴等部を見ると、浚稽山・姑且水・龍勒水・燕然山の位置は本稿の考察とそれぞれ一致する。しかし涿邪山・匈奴河水・私渠比鞮海の位置は本稿の比定が正しいであろう。龍勒水・匈奴河水を除いて、右の地名はすべてモンゴル語の對比で解き得たし、他にも従来位置不明であった山川名をモンゴル語を對應させることで明かにし得たものが若干ある。匈奴時代から清代までは十數世紀も経ており、地名はかなり變動しているごとく思われるかもしれないが、トルコ族支配の時代を通過しても尙匈奴時代の地名はモンゴル族の間に傳承されてきたようである。ここで扱った匈奴語地名は必ずしも多くはないが、他の匈奴時代の地名でも今後モンゴル語の地名の中にその姿を發見できるかもしれない。本稿が用いた方法は別に目新しいものではないが、従来餘り用いらなかった地圖類を利用することで、若干異見を述べることができた。讀者諸賢の叱正を請うと同時に、先學の諸氏の高見に加えた妄評については海容を乞いたいと思う。

註

(1) 佐藤長「匈奴國家の性格について」鷹陵史學第十五號、平成元年、一頁。

(2) 阿塔噶音達巴漢を *Aṭaṅgāyin dabagan* と見ると、アタガはモンゴルのシャーマニズムにおける東の四十八天の最高神アタガテングリに當るのかもしれない。利光有紀氏の、ホルツバートル著「哈騰根十三家神祭祀」の紹介の中にはアタガ神が存在するが（史林第七二卷二號、一四二頁）、この神はチンギスハン以後のモンゴル族に傳承されており、匈奴の時代に存在したかどうかは確認できない。

(3) 白鳥庫吉「東胡民族考」白鳥全集第四卷、一九〇頁。ただ

白鳥氏は、ウイグル以前にその地に匈奴・蠕蠕等が據れる故に、これをモンゴル語で解釋するも妨げなかるべしとし、モンゴル語 *Učken* (小ヤ) であり、それがトルコ語 *Üčken* で寫されたとする（前掲書一九一頁）。

(4) 王先謙「漢書補注」第八下之一、張掖郡居延縣の條に、居延縣城内なることをいう。森氏は勞幹氏の説に従い、遮虜郭は後の西夏の首都カラホトであるとす（森鹿三「居延漢簡序説」東洋史研究第十二卷三號、三頁、一三三頁）。しかし居延縣城の位置は、中國の調査によっても二か處が擬定されており、實際には何れとも確定しがたいようである（永田英正

『居延漢簡の研究』同朋舎、平成元年、四二二頁、四四一頁註九並に四二四頁の「エチナ河流域の漢代遺址圖」。又陳夢家氏は、居延都尉府をカラホトの西方の破城子 Mu-darbaljin の地に當てるが、この説の成立しないことは永田氏が述べているごとくである（永田前掲書四四五頁）。

(5) 白鳥「弱水考」、白鳥全集第五卷、六頁。

(6) 塔奇驛は塔楚河の南端にあり (Fuchs, Nr. 19)；Taki *gyaman* と綴られる所である (内府秘圖三排四號)。この驛は内府輿圖では驛の位置は標示されているが、驛名は脱落している。今はフックス並に秘圖によってその位置が確認される。

(7) 白鳥「烏孫に就いての考」、白鳥全集卷六、三九頁。

(8) 世祖はこの後、高車が已尼陂に屯していることを知り、左僕射安原等を遣してこれを降服させた (魏書蠕蠕傳、神麤二年八月の條)。已尼陂の已を已字の誤りとすれば、多分それはハンガイの東南端にある伊呢爾阿林 (内府輿圖七排西一)・伊呢兒阿林 (Fuchs, Nr. 6)・Tui alin (内府秘圖二排三號) であろう。

(9) 山田信夫「テュルクの聖地ウトゥッケン山」北アジア遊牧民族史研究、東大出版會、一九八九年、六五頁。

(10) 駒井義明「前漢匈奴地名略考」史林第一五卷三號、一九三〇年、六九—七〇頁。

(11) 突厥時代にもハンガイ山が天山と呼ばれたことは岑氏が既に注意している (岑仲勉「外蒙於都斤山攷」突厥集史下册、北京、中華書局、一九五八年、一〇七九—八二頁)。

(12) 尤も高さからいえば、その西方バヤンホンゴル市の北に二、〇〇〇フィートの山があり、これがハンガイ山脈で最高山である (ONG, F-8)。

(13) ハヌイ Qanui の意は不明である。内府輿圖 (七排西二) では胡努伊必拉がこれに當る。

(14) 後漢書南匈奴傳、建初八年の條に、

北匈奴三木樓皆大人稽留斯等率三萬八千人、馬二萬匹、牛羊十餘萬、歟五原塞降。

とあるが、三木樓皆が三木樓山と如何なる關係にあるかは定めない。記して後考を俟つ。

(15) 「中華人民共和國地圖集」地圖出版社、北京、一九七九年、第三十六圖。尙扎格蘇治井の治は台字の誤りではないかとの疑いもある。台を正しいとすれば、Tiyasutai (魚のいる) の寫であろう。

略語表

白鳥全集＝白鳥庫吉『白鳥庫吉全集』岩波書店、昭和四十四年—四十六年。

匈奴篇＝内田吟風『北アジア史研究』匈奴篇、同朋舎、昭和五十年。

内府輿圖＝乾隆内府輿圖 (清十三排圖)、北京、乾隆四十年。

内府秘圖＝清内府一統輿地秘圖、天理圖書館藏。

Fuchs＝Walter Fuchs, *Der Jesuiten-Atlas der Kanghsi-Zeit*, Peking, 1943.

ONG＝Operational Navigation Chart.